

JHFREPORT



第15回パラグライディング世界選手権より（メインテイクオフ）。P10からの報告をご覧ください。

仲間と自分自身のために情報を共有する

フライヤーの誰もが仲間と自分自身の安全飛行を、楽しいフライトを願っているでしょう。体力気力の続く限り飛び続けたいと考えている人も多いはず。しかし、気になるのは事故です。「こんなにおもしろいこと、もっとたくさんの人に体験してもらいたい」と思っても、大きな事故が続けば、誰かを誘うのは気がひけます。自分は安全を意識しているから大丈夫と思いつつ「明

日は我が身か」と不安になるかもしれません。

スカイスポーツは、自然のなかで、しかも空を飛ぶ以上、まったくリスク無しというわけにはいきません。そのリスクをできるだけ小さくするためには、情報を共有することが大切です。

過去に起きた事故の情報、機材や飛行技術についての情報、気象や地形に関する情報などを共有できれば、それ

を知らなかったために起きる事故を回避することが可能になります。

これから飛行の醍醐味を知る初級フライヤーはもちろん、多くの経験を積んだベテランパイロットも、共有する情報を咀嚼し消化することで、自身の安全マージンを広げてください。そして、もっと空を楽しんでください。（アクシデント・インシデント情報に関するJHFの取り組みをP7に掲載。）

スポーツ&LIFE



JHFレポートはスポーツ振興くじ助成金を受けて発行しています

JHFフライヤー宣言

1. 自分の意志と責任でフライトします。
2. 自己の健康管理を行い、健全なフライトをします。
3. 社会のルールを守り、第三者に迷惑をかけません。
4. 自然を大切にします。

モーターパラグライダー浮力体実験

水辺のフライトにライフジャケット装着は必須

報告：JHF補助動力委員会 委員 伊尾木 浩二

7月23日（日）、琵琶湖でモーターパラグライダー安全セミナーを開催。近年多発するモーターパラグライダーによる水難事故を防ぐため、多くのご協力を得て、実際に水に入っの浮力体実験も行いました。

（主催：公益社団法人日本ハング・パラグライディング連盟 補助動力委員会 協力：MKクラフト、LOCAS、フライトシステム 警備協力：滋賀県大津水上警察隊、滋賀県彦根市警察署）

今回の実験では、燃料タンクによる影響、ライフジャケットの必要性を検証したほか、空中で意識不明に陥って着水した場合に呼吸確保ができるのかどうかの検証も行いました。

22項目の実験に使用した機材は下記のとおりです。

1) ライフジャケット：2点

浮力16kgクラス、自動膨張式、股ベルトなし・あり

2) パワーユニット用浮力体：3点

浮力16kg、26kgクラス、自動膨張式、分離型など

3) パワーユニット：3点

環境に配慮し、エンジン及びマフラーを外して同等の錘りを装着。ユニット重量22.6kg、タンク容量14ℓ設定

実験は、同一人物を被験者（パイロット）とし、ユニット用浮力体のみ装着時、パイロット用ライフジャケット装着時、燃料の搭載量を変えた場合など、さまざまな条件で着水して、被験者本人の意見と外部の観察により、まとめていくことにしました。

今回の目的のひとつは「万一、空中で意識を失って着水しても、呼吸確保できる状態」を探し出すことでしたが、これが確実という状態を見つけることはできませんでした。しかし、装備や着水時の対応策については、有意義な検証結果を得ることができました。

今後もさらに実験を行い、水難事故を繰り返さないよう情報を発信していきたいと考えています。

海岸・河川・湖等の近辺で

フライトする際に注意すること

今回の実験では、浮力体を装備しても決して安心できない結果も出たため、今後、メーカーへのリクエストも含め、より高い安全性を確保するにはどうしたらいいか、検証を続けていきます。そこで、JHFレポート今号では、

現段階でお伝えできることを記します。

1) 浮力体を装備していても着水時におけるリスクは大きい。

万が一エンジントラブルが発生しても、海岸・湖岸へ戻れる高度を確保して飛ぶことが望ましい。競技や業務空中撮影のため低空をフライトする際は徹底したサポート態勢が欠かせない。

2) 浮力体はパイロットとユニット両方に装着する。

特にパイロットはライフジャケットを装着することが必要。股ベルトがあるとさらに効果的。

3) 燃料はタンクに半分以上残すようにフライトすることが望ましい。

燃料の残量が少ないとタンク内の空気容量が多くなるため、腰の位置で大きな浮力が発生し、パイロットがうつぶせになってしまう（P4図参照）。

実験に使用した機材

●ライフジャケット



●ユニット用浮力体



●パワーユニット



実験の様子



台から飛び込む



着水



一度沈んでから浮力体が自動膨張し始める



浮力体の片側に先に膨らむことが多かった



横回転の動作で仰向け姿勢になる



この姿勢になれば理想的



うつぶせから仰向けになるのは難しい。状況によっては仰向けにできないことが多い。

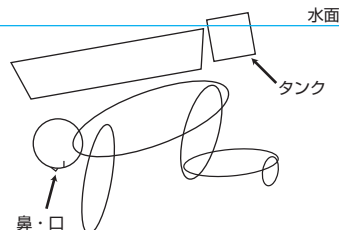


うつぶせになって呼吸が確保できず危険な状態



呼吸を確保できる状態





燃料が満タンであれば、うつぶせにはなりにくい。少ない燃料でのフライトは危険。

4) 着水した瞬間に浮力体が自動膨張するわけではない。

着水が回避できないときは、着水前に大きく息を吸い込み、水中で浮力体が自動膨張するまでの時間（数秒）に備える。

5) うつぶせの状態から縦回転の動きで顔を上げることは困難。

着水しうつぶせになってしまったら、横回転の動作で仰向けになること。着水後のイメージトレーニングもしっかり行う必要がある。

6) 高度は高いが岸まで届かない／風に流されるなど、着水が確実になった場合は、着水前に離脱する。

パイロットがライフジャケットを着着していれば、着水前にユニットのバックル類をはずして飛び降りることも手段のひとつ。但し、ユニットが沈まないよう、浮力体を装着のこと。

7) 浮力体も定期点検が必要。

最低でも年に一度の点検を推奨する。今回の実験でも、浮力体にパンクや破損が発生した。

ライフジャケット装着は

最も重要な着水対策

海岸・河川・湖等の近くでは、水上を飛ばないコースを選んでも、風に流されるケースがあります。

水辺でフライトする際は、必ずライフジャケットを着着すること。これが、最も効果のある着水対策といえます。但し、正しい装着と適切な装備が必要です。

1) 正しい装着

ライフジャケットは、身体につければいいのではなく、しっかりとベルトを締めて身体に固定します。股ベルトがあれば、ライフジャケットが身体からずれにくく、呼吸がより確保しやすくなります。

2) 適切な装備

浮力容量は動力付きではないパラグライダーもモーターパラグライダーも最低15kgクラス以上、CO₂容量は33g以上のものを推奨します。DHVのSIVにおいては27.5Nクラスを推奨しています。

事故を繰り返さないため

琵琶湖フライト安全協議会を発起

2016年、琵琶湖でモーターパラグライダーの事故が続き、短期間のうちに水難死亡事故が2件発生しました。このような重大事故を繰り返さないために、またエリア外からの単独フライトによる問題を無くすために、琵琶湖フライト安全協議会を設立。周辺クラブ及びスクール、警察関係者も集まりルール作りを行いました（このルールでも浮力体装備は必須）。

モーターパラグライダーの

安全講習会を開催

JHFでは、パイロット向けの安全講習会を各地域で開いています。都道府県連盟やスクールなどで参加者が20人以上集まれば、講師を派遣し、過去の事故も参考とした講習を行い、配布資料も用意します。

講習会を希望する方は、JHF事務局にお気軽にご相談ください。



安全セミナー／浮力体実験の参加者・スタッフ。

心の共有から大きな安全へ

JHF補助動力委員会 委員長 須藤 彰

昨年、補助動力委員会では「MPGパイロット安全セミナー」の資料を作り、全国で講習を行って来ましたが、まだまだMPG（モーターパラグライダー）パイロットの人たち全体の安全に対するモラルを高めて行くところまではいっていません。

今年に入ってから、MPGフライトに関するさまざまな苦情がJHF事務局に寄せられています。なかでも北海道で自衛隊駐屯地上空を飛行するなど、常識では考えられないよ

うなことが起きている、残念ながらそれが現実です。

団体と個人、個人と個人など、まだまだ横の繋がりが薄く、MPGパイロット同士の情報共有ができていないことが、モラルのないフライトの一因となっています。この足りない部分をみんなで補わなくてはなりません。まずはパイロット同士の「挨拶」「声掛け」など、個人ですぐに行えるパイロットの「心の共有」から始めてみませんか。

自衛隊駐屯地上空を飛ぶというような知識不足によるルール違反は、地元のフライヤーに連絡を取り情報を得ることにより無くすことができます。旅先など初めて行く場所でフライトするときは、事前に地元の情報（ローカルルール）や、公的施設（自衛隊、空港、大型燃料施設など）の有無などを確認し「知らなかった」ために起きる事故を無くしましょう。

まずは小さな一歩から、大きな安全へ繋げましょう。

現在のハンググライダーで、 注意しなければいけないチェックポイント

JHF安全性委員会 委員 山本 貢

キングポストレス（ツノなし）のハンググライダーが登場して以来、ハンググライダーの構造はぐっと複雑化してしまいました。しかし、それを保守点検するためのパイロットのハードウェアに対する知識は、現在も、意外なほど無知な状態なのではないでしょうか？

今回は、現在のハンググライダーで特に注意すべき点検項目について解説してみたいと思います。

トランスバースバテン

まずは、キングポストレス機が登場して、それ以後確立された「トランスバースバテン（横渡しバテン）」についてです。

これは、現在のハンググライダーにおいては、キングポストレス機に限らず、ほとんどのグライダーに装備されるまで普及しました。リミッター、ダイブスティック、ラフラインなど、ピッチの安定を保つ上で重要な装備を、さらにその効果を助ける目的でつけられたものです。

上記のリミッター、ダイブスティック、ラフラインが、セールを持ち上げている箇所に、バテンからバテンまで持ち上げるような形で取り付けられた真っ直ぐなバテンです。

このトランスバースバテン。普段はセールの中の筒状のポケットに収納されていて、外れることなんてないように思えるのですが…。実は、ひょんなことで、このトランスバースバテンが、セールのポケットから飛び出してしまうケースがあります。

これ、実はとても怖いトラブルなんです。

トランスバースバテンが外れてしまうと、ピッチの安定が正常な状態と比較し、大幅に欠如してしまいます。その結果、ハンググライダーは乱れた風の中などで、ピッチの安定を失いタッキングに入りやすくなってしまいますのです！

トランスバースバテンは、簡単には外れないようにできていますが、所詮

はセールのポケットに突っ込んでいるだけ…。何かの予期せぬ力などがその箇所にかかれば、簡単に外れることがあります。

では、どうやってそのトラブルを見つけるか…。それは、トランスバースバテンがつく箇所のセールに、不自然な「持ち上がり」がないかチェックすれば良いのです。トランスバースバテンが正常ならば、セールは平らな状態になっているはずですが、もし、トランスバースバテンがセールのポケットから外れた状態だとすると、トランスバースバテンが斜めになってしまうため、セールに不自然な持ち上がりが発生します。

リブのファスナー外れ

次に現在のハンググライダーで注意したいことに、リブのファスナーがとれてしまうことがあります。

現在のハンググライダーのほとんどは、翼の中に「リブ」が装備されています。このリブも、トランスバースバテンと同じく、ハンググライダーのピッチの安定を保つ上でなくてはならないものののですが…。

リブは、セールの縫製の関係で、下面側がファスナーで留められており、これも、何かの拍子でファスナーが外れてしまうことは十分あり得ます。1箇所だけファスナーが外れたとしても、ちょっと引っ張るだけで、その箇所を起点にファスナーが一気に全部外れてしまいます。

リブのファスナーがとれてしまうと、やはり、ピッチの安定が著しく欠如し、荒れた風の中などでタッキングに入りやすくなります。

リブのファスナーを点検するには、翼の中を覗き込み、直接目で確認してください。

直接目で見るできない箇所については、その箇所の下面のセールを少し引っ張ってみる方法もあると思います。

セールの縮み

最後に…。

現在皆さんが使用しているハンググライダーの中でも、少し古くなってしまったグライダーで注意しなければいけない点も補足しましょう。

古いグライダーでは、老朽化に伴うセールの縮みも注意しなければいけません。セールが縮むと、ラフラインの効果が薄れてしまい、ピッチの安定が欠如し、やはり、上記の最新型のハンググライダーのトラブルと同じく、危険な状態になることがあります。

これをチェックするには、VGを100パーセント引き、セールにラフラインの影を映してチェックする方法があります。正常ならば、ラフラインがピンと張った影が映るはずですが、セールが縮み、異常がある場合は、VGを張ってもラフラインが緩んだ状態となります。

これは、VGのないグライダーでも、同じように翼にラフラインの影を映すと、過剰にラフラインが緩んでいたたりする場合は、セールに異常があると考えたほうが良いです。VGのないグライダーで、適切なラフラインの状態は、少しだけ緩んで、セールの動きを束縛しない程度になります。

しかしこれらのチェック方法は、ハンググライダーの飛行に少し慣れた方でないと判断できない場合もあります。

古くなって、ちょっとセールの状態が不安かな？と思えるときは、もう新品のグライダーに替えましょう！

セーフティノーツの活用を

JHFウェブサイトの安全性委員会のページに「セーフティノーツ」があるのでご存知ですか。

セーフティノーツでは、機体や装備の安全に関する情報を提供しています。あなたのグライダーやハーネスなどの安全について、重要なお知らせがあるかもしれません。ぜひチェックしてください。

安全で楽しいフライトのために

各地で活躍する教員検定員23人〈2〉

この3月、教員検定員の任期満了に伴い、JHF教員検定員研修検定会を開催。研修を受けた後、学科試験、5分間スピーチ、実技検定を通過した23人が新教員検定員として活動を開始しました。

それぞれ日本のハング・パラグライダー界をリードしてきた23人の横顔を、毎号紹介していきます。今回は、この6人です。



阿倉 聡 (静岡県)

私が28年前、兵庫県でパラグライダーを始めた頃に比べ、パラグライダーの性能は比べ物にならない程進歩したのは誰が見ても一目瞭然です。

では、インストラクションの方はとどうでしょうか？ 全国のパラグライダースクールのインストラクターのレベルは、知識は、教え方の善し悪しは？

そんな中、私にとってこのJHF教員検定員という資格の取得は非常に意味のあることでした。

これから数々の検定会や更新講習会を通じ、各インストラクターの方々と共に、日本のパラグライダー界がより良い方向へいけるよう少しでもお役に立てればと思います。

まだ1年目で色々ご迷惑をおかけすることもあると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。



伊尾木 浩二 (群馬県)

この楽しいスカイスポーツをどう伝えていくか？ スカイスポーツ人口をどう増やしていくか？

私は今年でパラを始めて27年目になるが、最初の数年は趣味で飛んでいた。この時代に見た墜落事故は多く、友達をパラに誘う勇気は無かった。この頃の私は指導者になるなんて全く想像もせず、もしも指導者なら人を気軽に誘えるような環境ができればいいのになと感じていた。誰でも事故を起こした

いわけが無い。この時代は情報が少なく皆の経験度が浅すぎて、理想の形に持っていくには、難しかったと思う。

この頃の気持ちは今もブレてはいない。今では、単純に『リスクある日は飛ばない』『良い時はいっぱい飛ぶ』『自分に合った楽しめる機材を選ぶ』こと、これだけで安全性は高くなっている。

私は主にDHVの情報を入手し、少しでも事故を減らせるよう役立つ情報を今後も伝えていきたいと思っています。皆がハッピーで友達を気軽に誘えるように。



井藤 志暢 (沖縄県)

今年、還暦を迎え我が人生を振り返ると、人生の半分以上はハング・パラに時間を費やしてこれました。これも恩人、同僚、仲間、先輩、後輩、家族のおかげ、この業界に育てていただいたことに感謝しています。

私は、飛びに関しては、たいしたセンスもなく、これと言って上手くもありません。これからもっと努力すればとんがった所へ行けるノリシロがあるとも思えません。しかし、コーチ（指導者）であるならば、もう少し努力し、勉強をし続けるならば、まだまだ味のあるコーチになれるノリシロがあるような気はします。

まあ、この先あまり長くない時間も、やはりパラに時間を費やすことになるでしょう。ならば、不器用ではありますが、私なりに力まず、目立たず、諦めず、後輩、次世代、後継者の育成にあたり、微力ながらこの業界に恩返しができるよう努力したいと思っています。



小川 勝良 (長崎県)

1980年、ハングで初めて飛んだと言うか、足が1mぐらい浮いて、あーあーと言う感動が忘れられず、あれから37年飛んでいます。ハングは10年程飛んで、現在週末はパラとモーパラのス

クールを長崎で頑張っています。

教員になったのは、日本や世界の教員の色々な情報が入って来るんじゃないかと考えたからです。地方に居ると、なかなか技術的な情報が入りません。2000年PG教員検定を受けましたが実力不足で落第し、2回目の2002年に合格をいただいた次第でした。その時感じたのは、助教員の時に教員になるための沢山の情報、技術の共有があると助かるということ。当時の私は、検定会に行き、受験生の講習実技や実技検定を見て、あんな風にやるんだと情報を得たほどでした。

今は、実技の見本は、JHFの教員・スクール事業委員会により素晴らしい教習用DVDが作成されており、大いに参考になります。今から教員、助教員を目指す方は、地方でも検定を受けられますので、最寄りの教員検定員からアドバイスを沢山受けて受験してください。

私も今後、高齢の波に乗りながらも若いヤル気のある人材を見つけ、次の若い教員を育てることを目標にしています。長崎で勉強したい方は是非来てください。待っています。



加賀山 務 (静岡県)

今回JHF教員検定員を拝命させていただきました。ご存知の方も多いと思いますが、私自身の仕事は現在、スクールでのインストラクターの実務ではなく、パラグライダー用品の輸入販売業で各地区の訪問営業を行っています。直接的に練習生に対する講習を実践しているわけではないので、長年スクールを行われている教員の皆様に適切な指導方法や講習要領をお伝えしたり、各スクールで実践されている教習カリキュラムに対してご提案を行うといった、教員の指導・育成の仕事については実務経験が不足していると感じております。

一方で、パラグライダーの進化に伴い、翼の構造やレイアウトといった技術的な変化、それに対する取り扱い注意点や操作要領の変化といった、技術

面の情報、昨今大いに普及している各種の最新レスキューパラシュートの取り扱いや特性といった新しい技術情報については、事業者やメーカーなどを通じて、できるだけ収集するように努めています。特に安全に関する技術的な情報については、積極的に皆様にお伝えしていければと考えております。

また、営業を通じて各地を訪問する機会も多いので、お気軽にご意見、ご提案、ご質問などお声掛けいただければと思っております。

パラグライダーを長く・安全に楽しんでいけるように、皆様の一助になれば幸いです。



殿塚 裕紀（栃木県）

パラグライダーのインストラクターという職業の素晴らしいところ。それは、「鳥のように空を飛びたい。」という生徒さんの夢を叶えることができることです。

みなさんに気持ちよく夢を叶えていただくため、質の高い指導者になることが私の目標です。インストラクターになってからずっとそう思っています。

そのためには「フライト技術」が高いのは当たり前で、「指導力」も高く

なければなりません。

20代の頃は色々なエリアでお手伝いをさせていただき、さまざまなインストラクターの方の指導方法を学ぶことができました。これは今の私の大きな財産となっています。30代になってからは業界の外にも勉強をしに行き、更に指導力に磨きをかけるため努力してきました。

今後も教員更新会やセミナーの場では、参加される皆さんの指導方法を学ばせていただきます。そして私が培ってきたノウハウをお伝えして情報を共有し、全体の指導力の向上に繋げたいと考えています。

JHFの動き

この6月に選任された新理事の 担当事業が決まりました

2017年度・2018年度のJHF役員（理事9名、監事1名）が6月13日（火）のJHF通常総会で、正会員の投票により選任されました。任期は2019年通常総会まで。各理事の担当事業・委員会は次のとおりです。

全体統括：内田孝也 予算編成：増田憲治 渉外・広報・出版：市川孝 国際技能記章：大澤豊 スカイレジャー航空無線：芦川雄一郎、大澤豊 CIVL海外：殿塚裕紀 普及：市川孝、金井誠、殿塚裕紀 PG競技委員会：大澤豊、増田憲治 HG競技委員会：大澤豊、増田憲治 補助動力委員会：小林秀彰、安田英二郎 教員・スクール事業委員会：大澤豊、金井誠、小林秀彰、増田憲治 安全性委員会：芦川雄一郎、大澤豊、安田英二郎 制度委員会：市川孝、殿塚裕紀、小林秀彰 ハングパラ振興委員会：殿塚裕紀、金井誠

HGクラスV日本選手権

11月に足尾山で開催

11月2日（木）～5日（日）、茨城県石岡市の足尾山ハンググライダーエリアで『2017ハンググライディングClassV日本選手権 in 茨城』を開催します。

2018年JHFカレンダー

12月に頒布開始

好評のJHFカレンダーを今年も12月から頒布します。この春から8月末までカレンダー用の写真を募集し、多く

のご応募をいただきました。審査員による厳正な審査によって、応募作品のなかから13点を採用します。詳細はJHFウェブサイトでお知らせします。

PG日本選手権

台風の影響で不成立

第29回パラグライディング日本選手権を9月15日～18日に茨城県足尾山エリアにて開催しました。タスクは2本成立しましたが台風の影響で日本選手

権の成立条件に満たず不成立。Jリーグとしては成立し、総合1位は中川喜昭選手（写真左）、女子1位は中目みどり選手（同右）でした。



求む、 アクシデント・インシデント情報

事故をなくすことはフライヤー全員の願いであり大きな目標でしょう。起きてしまった事故を二度と繰り返さないために、JHFでは安全性委員会が中心となって事故の報告をまとめて、フライヤー会員の皆さんに注意喚起する活動を続けてきました。

ところが、報告されない事故があります。推測するに、事故を報告すると「そのエリアやインストラクターに悪い影響があるのではないか」「スクールの評判が下がってしまう」「事故当事者に恥ずかしい思いをさせる」などの理由によるようです。

また、そのエリアのインストラクターが仕事に追われ時間がない、事故を目撃したものの報告の方法がわからないこともあるでしょう。

そこで、事故の目撃情報をJHFウェブサイトから簡単に報告することができるようになります（10月末スタートの予定）。事故を目撃したら、どなたでも、会員トップページから入力用画面に入り、日時や場所、事故の状況などをわかる範囲で入力、送信してください。

報告というと気後れしてしまいそうですが、同様の事故を繰り返さないための情報集めに、ご協力をお願いします。情報を共有することで事故を減らしていきましょう。

フライヤーが怪我をしていなくても、機体が壊れていなくても、また、事故にはならなかったけれどヒヤリとしたりハッとしたインシデント体験についてもぜひお知らせください。

■愛顔つなぐえひめ国体デモスポ大会 愛媛県ハング・パラグライディング連盟

9月9日、第72回国民体育大会のデモンストレーションスポーツ競技としてパラグライディングアキュラシー大会が開催されました。愛媛での国体開催は64年ぶり。しかも単独開催となれば盛り上がりも半端？ではない。

天候の心配はあったけれど、前日から好天に恵まれて44名の選手が当日エントリーされました。この日は特別とあって、ターゲットバードゴルフの会場をランディングに設定。綺麗に芝生を手入れされたランディングポイントは、緑のカーペットを敷いたように見えた目も最高。

アキュラシー大会ということもあり見学に来ていただいた方にもわかりやすく、近くに降りた選手、中心を見事に押さえた選手には盛大な拍手。おまけに愛媛県議でフライヤーでもある宇高氏によるナレーションも見事で、観客を沸かせていました。

当日の朝は雲海が見られる条件で、天気が良くなるのは間違いなし。しかし風が東っぽく方向が定まらないため、競技開始は1時間遅れの11時。競技は2本の合計ということで時間を気にしていたのですが、テイクオフスタッフと選手の皆さんの協力のおかげで、余裕でクリアー。次々と降りてくる選手に観客も見入っていました。アキュラシーでなければ、サーマルコンディションで高く長く飛んでいられそ

うな状況。「降りたくなあ〜い」と思いながらランディングに向かう選手の気持ちが伝わってきました。

競技結果は、見事1本目にど真ん中、アラームを響かせた丹波パラグライダーズスクール校長の梅迫選手が2本目も15cmという素晴らしい成績で優勝。やはり上位の選手は30cmの的をはずしませんでした。女子のトップは総合でも4位に入った伊藤選手、さすが2本目に10cmを決めてアピール。女子選手で電光掲示板を光らせたのはただ一人でした。

スムーズな競技運営で、閉会式まで余裕の待機。そこで宮田選手がタンドムフライトのビッグなおもてなしを提案。地元の梶川選手と2名でじゃんけん勝ち抜き戦を行い、観客と役場スタッフの方3名が空中散歩を楽しみました。今後のいい流れを呼び込めれば幸いです。

今大会は天候にも恵まれてパラグライディングの魅力を最大限に国体デモスポとしてアピールできました。これも参加していただいた選手をはじめ関係者の方々、スタッフ、地元の皆さんのご理解ご協力ご支援のおかげと役員一同感謝しています。「お世話になりました。ありがとうございました。」

[総合成績]

- 1位 梅迫 賢一
- 2位 小川 勝良
- 3位 下野 悠敬
- 4位 伊藤まり子

- 5位 浅田 寛之
- 6位 梶川 定利

[女子成績] *表彰は行っていません

- 1位 伊藤まり子
- 2位 富永あゆみ
- 3位 宮田 理恵

■小・中学生パラグライダー体験会 東京都ハング・パラグライディング連盟

8月5日、6日の両日、東京有明・東京臨海広域防災公園（そなエリア）にて東日本大震災復興支援熱気球イベント・第21回「空を見上げて」in東京に参加しました。

2015年より日本航空協会（JAA）からの依頼によりJHFも参加。JHFからの依頼を受けて、東京都連がパラグライダー浮上体験のイベントを担当しました。

東京都連理事の松原正幸さん（東急線の二子玉川駅近くで「たまっパラ」を毎月開催中）が取りまとめ、日本学生フライヤー連盟の皆さんのご協力を得て実施しました。

2日間で100名を超える小・中学生の皆さんが浮上体験されました。参加した皆さんの笑顔はとても輝き、この中から将来のパイロットが一人でも現れたら……と考えています。

多くの皆さんのおかげで事故もなく無事にイベントを終えることができました。感謝申し上げますとともに、来年以降も当イベントは継続される予定なので、ご協力をよろしくお願いします。



美しい芝生上のパッドを狙って……。



「みきゃん」も駆けつけて選手・関係者記念撮影。



総合 1位～6位の選手たち。



女子 1位～3位の皆さん。



体験者の歓声は暑さも吹き飛ばす勢いでした。

滑空機440m、人力ディスタンス40kmの大記録！

第40回鳥人間コンテスト 報告：山本 貢

7月29日・30日に琵琶湖で開催された鳥人間大会。今年は記念すべき40周年記念大会となった。

その記念すべき大会の中で、今回は、とうとう同じ「40」という数字がつく大記録が作られた！

まずは滑空機部門。

好条件が一日続く中、順調に競技が進められた。

競技開始後、すぐに日大生産工学部が440mという大記録をたたき出す。

今回の大会には、現役ハングフライヤーの竹中氏が無尾翼機でチャレンジしていた。過去、糸谷氏（元ハングフライヤー）が出した、同じ無尾翼機での記録、261mを破ることが彼の目標であったが、テイクオフ後すぐにピッチの安定がとれ切れずに墜落。

しかし、そのフライト後に、目標としていた糸谷氏がいきなり彼の目の前に現れ、「いいか！なぜおまえは飛ば

なかったのか分かるか！」と、ありがたいご教授をいただいたいらしい。

琵琶湖は暑いが、糸谷氏も本当にアツい！

300m以上の記録が6つも出た中、最後はディフェンディングチャンピオンの三鷹もばらチーム。

しかし、ここにきて急にアゲインストの風が強まり記録は340m止まり…。

優勝は日大生産工学部へと輝いた。

次は、人力プロペラ機ディスタンス部門。

早朝の雨予想で、どうなることかと心配されたが、9時くらいより競技が開始された。風の弱いす曇りが続き、結果的には一日中好条件となる。

競技開始後すぐに、大阪府立大が10kmを超える記録を出す。これに続いて東京工業大が16km以上。しかし、この後とんでもないことが起こった！

昨年初参加の社会人チーム、バードマンハウス伊賀。

このチームが20km先の折り返し点を回り、見事に再び観客席の前まで帰ってきたのである！

熱狂する観客席！

記録は40km！

これ以上はない鳥人間史上最高の記録を出したのである。

記念すべき第40回大会に、もうこれ以上はない記録40kmとは、何とも縁起が良い。

パイロットは渡邊氏。設計も彼自身のものである。彼は長年一人で地道に努力していたが、ようやく、その努力が実を結んだ。

彼は某工作機械メーカー勤務のため、その工作機械が使える、とても完成度の高い機体を作っていた。たまたま私はこのチームの機体を検査したが、

その出来栄はとても美しく、もはや芸術品といえる、とても完成度の高いものであった。

そのあと、またも社会人チームROKKO WORKSが30km以上を記録。

このチームは今年初参加ではあるが、パイロットの宮内氏には見覚えがあるため、かなりのノウハウを蓄積したチームだと思う。これからの活躍が期待できる。

この後も大学チームが好記録を出し続けるが、優勝はやはりバードマンハウス伊賀の渡邊氏に輝いた。

今回の鳥人間大会の特徴は、人力プロペラ機ディスタンス部門に社会人チームの活躍が目立ったこと。

人力飛行機は、その製作やテストフライトに人手が必要なため、学生チームが中心になっていたが、これからは社会人チームの活躍が目立つようになるかもしれない。



現役ハングフライヤーの竹中氏、無尾翼機で挑戦。



これからプラットフォームへと向かう竹中氏チーム。



琵琶湖を往復し、会場へと帰ってきた渡邊氏。



人力プロペラ機ディスタンス部門優勝者、渡邊氏。

「鳥人間コンテスト」プロジェクトチームが航空特別賞を受賞

9月20日の「空の日」に、一般財団法人日本航空協会の航空関係者表彰が行われました。

東京大学名誉教授の東昭氏に航空文化賞が贈られるなど、航空に関する功績が顕著な方々が表彰され、航空特別

賞（社会的に航空の発展、思想の普及啓蒙に特に顕著な貢献をした方またはグループに贈る賞）を「鳥人間コンテスト」プロジェクトチームが受賞しました。「長年にわたり航空スポーツの魅力を広く社会に伝えるとともに、多

くの参加者に航空宇宙関係の進路に進む契機を与えるなどして、航空思想の普及に大きく貢献され」たことによるものです。鳥人間コンテストを協賛してきたJHFにとっても嬉しいニュースとなりました。

フランス三冠、圧倒的勝利。

7月1日～15日 イタリア モンテ・アヴェナ 報告：チームリーダー 岡 芳樹

7月前半、イタリアで開催されたパラグライディング世界選手権（XC）に47か国、男子133名、女子16名が参加。日本チームは上山太郎、呉本圭樹、廣川靖晃、平木啓子という顔ぶれで競技に臨んだ。日々のレース内容に関しては、JHFウェブサイト、PG競技委員会のフェイスブックに上山選手のレポートが掲載されているのでそちらを参照してください。

<https://www.facebook.com/jhf.pgc/>

今回世界選手権の舞台となったモンテ・アヴェナのエリアは、ヴェニスからの北70kmに位置する。ヴェニスからの平野が終わって最初に当たる山脈が、よく大会でも使われるバッサノエリアで今回のサブ会場でもある。さらに北上するとちょっとした盆地状になってまた山脈に当たる。これがモンテ・アヴェナ山脈になる。さらに北上するとそこは、所謂ドロミテ山脈になる。モンテ・アヴェナのメインのテイクオフは海拔1400mで正面はほぼ南。盆地の底は海拔300mほど。

タスクとしてはアヴェナ山脈を東西に移動し、時に沖だしをして、グランドを使って振り落とし、最後は、メインランディングから見える範囲でスピードレースをさせてメインランディングにゴールするタスク。

一方サブエリアのバッサノのテイクオフは海拔860mで正面は南。ランディングは160m。そこでのタスクは基本的には同じ東西に延びる山脈を東西に振って時に沖だしをしてランディングに降りるものであったが、通常使用されているバッサノのメインランディングではないところが一度ゴールに使用された。

今回、エリア全体に高度制限がかけられ、上限が2896mとなった。前回のコロンビアではサーマルが強く高度制限を超えてしまった選手が何人も出たので、気を付けないといけないなと選手と話していたが、何と、その高度まで雲底が上がる日は無く、全くの杞憂であった。

競技日として設定されたのは12日

間。7月9日のレストデイと10日のタスクがストップとなったが、ルール上タスクがスタートしてからスコアバックタイムを考慮して60分経過していないと自動的にキャンセルとなるため不成立となった日を除いて、10本のタスクが成立した。そのうちの3本はサブエリアのバッサノで行われた。また3本はタスクストップとなる。気象条件が非常に読みにくいのと、雲底が低く、サーマルもトリッキーなため、デイクオリティが1となったタスクはたったの4本。それでも一応実績としてはレストデイを除けば毎日フライトはできたことになる。

日本人選手は全員、このエリアで飛んだことが無く、何とか練習日に2、3本飛べただけでほとんどエリアの特性を知らない状態での参戦。非常に厳しい戦いを強いられた。それに引き換

え今回チーム戦でも総合でも女子でも世界選手権タイトルを獲得したフランスチームは、昨年のプレも含めてかなりこのエリアで飛びこんでいたようで、エリアの特徴をよく理解していた模様。日本チームも聖子ちゃん情報をいただいたりしたのだが、やはり実際に自分で飛んで得た情報ほど役には立たなかったところ。

個人戦での最終上位10人の選手のタスクごとの変動を見てみると、最終1位のピエール・レミ（フランス）、3位のユリ・ヴィディッチ（スロベニア）、5位のデューシャン・オロズ（スロベニア）、6位のルック・アーモン（フランス）の手堅さが歴然としている。また国別で見ても、個人で上位を占めたフランスとスロベニアの手堅さ、つまり層の厚さが歴然としている。スロベニアが開催地から近いことも優



日本チーム。選手4名とチームリーダーの構成。



開会式を見ようと大勢の人が町の広場に詰めかけた。



サブエリア、バッサノのテイクオフからゴールをめざす。



パイロットブリーフィングでタスクの情報を得る。



バッサノのメインランディングにゴール。



モンテ・アヴェナ、ゴールする平木選手。



左から総合2位、1位、3位（左がヴィディッチ）。



女子トップ3。聖子ちゃんが連覇、中央に立つ。



左から国別2位スロベニア、1位フランス、3位スイス。

位に働いたと考えられる。地元イタリアは、女子の3位で何とかメダルを獲得しただけで終わってしまった。それほどコンディションが読みにくいことの証でもある。世界選手権で上位に入るには、そのエリアでの経験にも増して天性の感性が大きく左右すると言うことかもしれない。

今回感心したのは、単にパラグライダーの大会を開催しているのではなく、自転車競技を同時開催したり、ランディングに超特大のテントを設置して飲食ができるようにしたり、夜にはコンサートをしたり（結構地元の人が

集まっていた様子）、近隣の村で地元の人と選手が一緒になって食事を楽しむ催し物を企画したりと、地元の人を巻き込みながら一大イベントとして行っていること。圧巻は開会式と閉会式。街中をパレードするのだが、集まった観客は半端ない人数。イタリア人は本当にお祭りが好きな国民のようだ。

最後に、タスク9が終了した際に、突然ドーピング検査が実施されたことを付け加えておく。恐らく今後、カテゴリー1大会では必ずドーピング検査を行うことになると予想されるので、選手は十分注意しなければならない。

成績

[総合]

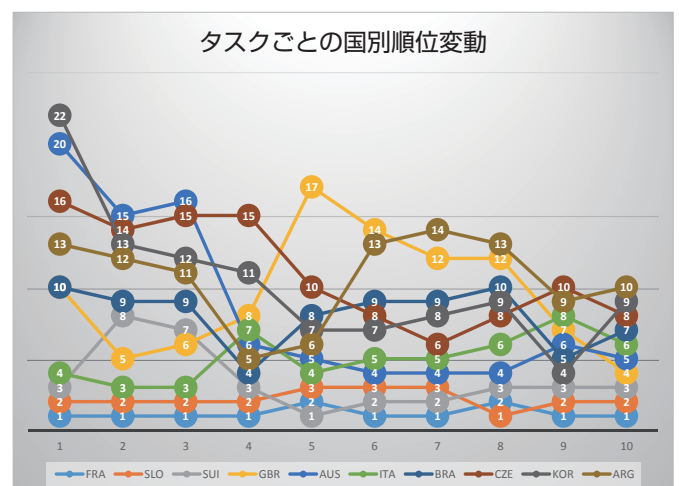
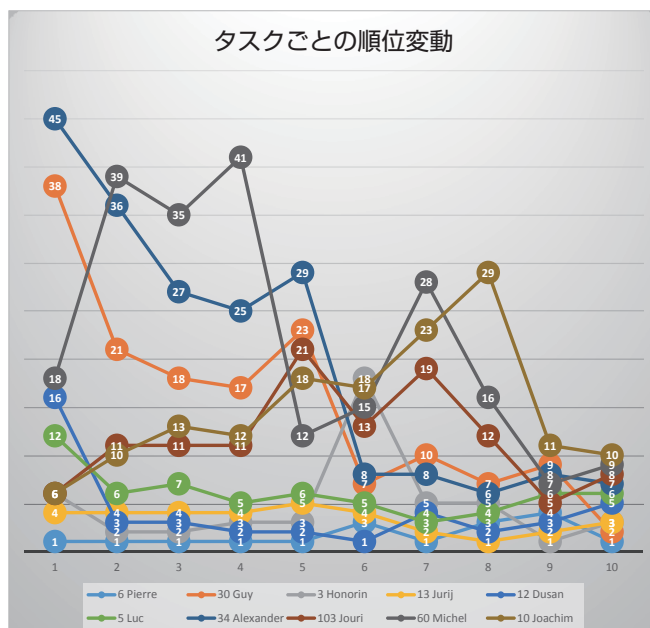
- 1位 Pierre Remy フランス
- 2位 Guy Anderson イギリス
- 3位 Honorin Hamard フランス
- 3位 Jurij Vidic スロベニア
- 廣川65位 上山77位 平木82位 呉本115位

[女子]

- 1位 Seiko Fukuoka Naville フランス
- 2位 Kari Ellis オーストラリア
- 3位 Silvia Buzzi Ferraris イタリア
- 平木5位

[国別]

- 1位 フランス
- 2位 スロベニア
- 3位 スイス
- 日本20位



新チャンピオンにチェコのベネシュ、イタリアは5連覇！

8月6日-19日 ブラジル ブラジリア 報告：チームリーダー 北野 正浩

今大会の開催地はブラジルの首都ブラジリア。市街地から北東に70kmほど離れた台地の縁からテイクオフ。タスク9本のうち7本では市街地の中心にある広場「エスプラナーダ」にゴールが設定された。

このエリアでは2003年にも世界選手権が開催されており、大門浩二と鈴木博司はこの時の経験者。昨年のプレ大会にも5名が出場し、エリアへの慣熟は充分。個人と国別の両方で表彰台を狙って大会に臨んだ。

女子世界選手権も同時開催の予定だったが、大会成立条件である「4か国・8人以上」の選手が集まらず不成立となった。日本代表の野尻知里・鈴木皓子・磯本容子の3名は、国別得点に関わらないオープン参加選手として出場が認められた。

さらに4名がオープン枠で参加し、総勢13名と、最も遠くからの参加にもかかわらず、最大のチームとなった。

回収車の運転は日本在住のPGパイ

ロット松元マルコス、現地PGインストラクターのジュニオール、現地PGパイロットのマルデンの3名。現地の言葉が通じ地理にも明るいため、これまでになく回収が容易だっただけでなく、どんなトラブルにも対処できる安心感は大きかった。

日中は30～32℃、朝晩は17～20℃の過ごしやすい気候で、毎日晴れて競技ができた。タスク距離は100～135kmで世界選手権としてはやや短め。サーマルはタスクの序盤は渋く、途中で逆転層がブレイクすると一気に好条件となる。しかし、日照時間が短いため、この好条件の時間帯に良い集団で一気に動かないとゴールが難しくなるという流れだった。

優勝争いはイタリアのアレックス・プロナーとクリスチャン・チエク、チェコのベトル・ベネシュとダン・ヴィフナーリクによる激戦となり、最終的にベトルが優勝して新チャンピオンが誕生した。国別ではイタリアが5連覇を達成した。

序盤は国別4位につけて好調だった日本代表だが、徐々に順位を落として最終的には7位となった。個人成績も鈴木博司の23位が最高で、「もっと上位を狙えた」という気持ちは否めない。

タスク6で田中元気が全選手でただ一人のゴールを決めて日本のパイロットの評価を大いに高めてくれたように、デイリーでトップ10入りすることは珍しくなくなった。選手の実力からいえば、国別も3位は充分に狙えた。技量的には世界の水準に遜色はないが、毎度ながら後半に入ってから成績が伸び悩むことが課題だ。長丁場の競技に対応できる体力と集中力をつける



台地の縁の崖から、オープン参加の氏家良彦選手がテイクオフ。風が入るので出やすい。



エスプラナーダゴール。なんと市街地のど真ん中！



地元TV局のインタビューを受ける大門浩二選手。



頑張ってくれたテイクオフスタッフ。



機体をセットアップする鈴木博司選手。



日本チーム11人がゴールしたタスク2。



タスク6でただ一人ゴールした田中元気選手。



回収のジュニオール、マルデン、マルコス。



総合トップ3。左から2位プロナー、新チャンピオンとなったチェコのベネシュ、3位チエク、各選手。



国別1位～3位。左から2位チェコ、5連覇という偉業を果たしたイタリア、3位ドイツ、各チーム。



オープン女子。左から2位バネ、1位コリーナ・シュビーゲルスハウゼン、3位野尻知里。

ための練習方法や生活習慣、栄養の取り方を研究すべき時だと思う。

最後になるが、今回も有志による支援活動「ハングエイド」により遠征費の支援をいただいた。応援グッズをご購入いただいた皆様と事務局に、この場を借りてお礼申し上げる。

成績

〔総合〕

- 1位 Petr Beneš チェコ
- 2位 Alessandro Ploner イタリア
- 3位 Christian Ciech イタリア
- 鈴木博司23位 砂間隆司24位
- 大門浩二28位 田中元気50位
- 加藤実65位 鈴木由路115位

〔国別〕

- 1位 イタリア
- 2位 チェコ
- 3位 ドイツ
- 日本7位

*女子世界選手権は開催されなかったが、オープン参加の女子選手上位者が表彰された。

アジア大会テストイベントでパラグライディングXC競技

JHFパラグライディング競技委員会 委員長 岡 芳樹

●アジア大会テストイベント

期日：2017年8月11日～14日

場所：ブンチャック（ジャカルタの南50km）、インドネシア

参加選手：85名、12の国と地域

日本チーム：呉本圭樹、入山朋一、山下敦子、中目みどり

今回、クロスカントリー（XC）競技もアジア大会の種目として開催することになり、FAIのルール上また実際にどの程度の競技ができるのかを見るために、テストイベントとして急遽XC競技が行われることになった。

ブンチャックはすでにアキュラシーの世界選手権を行っているので、エリアとしてアキュラシーで問題は無いのだが、XC競技として全くの未知数。テイクオフもXC用に新たに造ると言って実際に造ってはいたが、未完成。結局アキュラシーで使用したテイクオフを使用した。

大会期間中、毎日もやがかった感じで、雲底は上がってもテイクオフから200m位であったため、レースはできず、エラプスのみの競技となった。また設定されたタスクも8～11kmと極端に小さく、日本のJリーガーにとってもかなりテンションの下がるものとなった。それでも実力のある者が上位にランキングされたので、精一杯できるだけのことをした感じはあったのでは。大会が終わった後の1週間は青空も見え、25kmほどのタスクができたことと主催者からの報告があった。

2018年のアジア大会本戦では、アキュラシーを前半の4日で、XCを後半の4日で（逆になる可能性あり）やるようなので、うまく気象条件がはまれば、両方の種目が楽しめる大会ができる可能性はあるようです。

ちなみに、本戦では、各国男子7人、女子5人のチーム編成で、XC、アキュ

ラシーどちらも同じ選手が戦い、男子では上位4人の合計、女子は3人の合計でチームスコアが決まることになっています。また、メダルはアキュラシーの個人男子、個人女子、団体男子、団体女子と、XCの団体男子、団体女子の6個になります。したがってアキュラシーもXCも上手い選手がいる国が有利となります（それがインドネシアか？）。

成績

- 個人男子1位：ホン・ピルピョ（韓国）
- 2位：呉本圭樹、3位：ロニ・プラタマ（インドネシア）
- 個人女子1位：バエク・ジンヘ（韓国）
- 2位：山下敦子、3位：レイ・イエ・エチョ（中国）
- 団体1位：韓国チーム2、2位：韓国チーム1、3位：日本

（注）今回は本戦とは違う表彰方式が採用された。

和田浩二、平木啓子が日本選手権を獲得。

8月25日-27日 岐阜県池田山フライトエリア 報告：競技委員長 山谷 武繁



8ラウンドの競技が成立、海外勢が好成績。

8月25日から27日の3日間、岐阜県池田山フライトエリアにおいて、2017パラグライディングアキュラシー日本選手権in池田山が開催されました。大会期間中は天候に恵まれ、3日間で8ラウンドの競技が成立しました。今大会には地元池田町のアビ株式会社より賞金総額3,000,000円の協賛をいただきました。大会には海外からの参加選手も多く、5カ国総勢49名の選手が参加し、大会を盛り上げました。

競技初日はラウンド1が成立。半数近い21名の選手がパッドスコアというハイレベルな競技が繰り広げられた。



スラッチクラス総合1位～6位の各選手。

トップは0cmのChangmin Lee (KOR) 選手で、14選手が10cm以内という激戦となった。

競技2日目はラウンド4の途中まで競技が進んだ。5月の世界選手権で総合9位のJianwei Wang (CHN) がラウンド2以降、1cm、0cm、0cmと、立て続けに高スコアを出し、トップをキープした。これに韓国勢が続ぎ、上位のスコアは数センチを争う混戦となった。日本勢は和田、横井、古田がそれぞれ最低限のミスを1本におさえ、これに続いた。

競技3日目は朝から絶好のコンディション。10時頃からはサーマルが始め選手を苦しめる。しかし、上位陣はコンディションに関わらず、パッドスコアを連発。ファイナルラウンド直前で、1位 Jianwei Wang (CHN) 15cm、2位 Changmin Lee (KOR) 19cm、3位 Moonseob Lim (KOR) 21cmと僅差の戦いとなった。

見ごたえあるファイナルラウンドは Moonseob Limが1cmとプレッシャーをかけるも、2位 Changmin Leeは0cm。1位のJianwei Wangは3cm以内で優勝決定という中、2cmをたたき出し優勝、賞金1,000,000円を手にした。

今大会はラウンドトップも表彰され、8ラウンドすべてでラウンドトップは0cm。15名の選手が獲得するハイレベルの大会になった。

日本選手権は総合では和田浩二選手、女子では平木啓子選手というJリーグでも活躍する選手が獲得した。しかし日本勢のトップは和田選手の8位と、海外とのレベルの差を痛感させられる



パッドスコア続出のハイレベルな大会に。

結果となった。将来、フランス・パリ大会でのオリンピック種目にパラグライダー競技採用の可能性が議論される中、早急に取り組まなければならない課題のひとつなのではないかと感じた。

今大会に協賛をいただいたアビ株式会社の野々垣会長には、大会を盛り上げるためのバックアップをいただき、この場をお借りして感謝を申し上げます。また、地元池田山フライト協会、岐阜県連、ご協力いただいたスタッフの皆さんのおかげで素晴らしい大会を開催することができました。ありがとうございました。

成績

[スラッチクラスー総合]

- 1位 和田 浩二 静岡
- 2位 岡 芳樹 東京
- 3位 横井 清順 静岡
- 4位 古田 武史 埼玉
- 5位 吉富 周助 山梨
- 6位 平木 啓子 静岡

[スラッチクラスーオープン]

- 1位 Jianwei Wang 中国
- 2位 Changmin Lee 韓国
- 3位 Moonseob Lim 韓国
- 4位 Oh Dong Hyeon 韓国
- 5位 Jihun Yoo 韓国
- 6位 Kim Kihyeon 韓国



スラッチクラス、オープンのトップ6。

[スクラッチクラスー女子]

- 1位 平木 啓子 静岡
- 2位 伊藤まり子 愛知
- 3位 小川由希子 石川

[スクラッチクラスー女子オープン]

- 1位 Dagyeom Lee 韓国
- 2位 平木 啓子 静岡
- 3位 伊藤まり子 愛知

日本選手権者から

□和田浩二

今年のアキュラシー日本選手権は、レベルの高い海外選手の参加があったため日本選手権者になったと言っても結果は散々でした。日本選手権者メダルは辞退したい気分ですが、せっか

くなので記念に貰っておきます。

また、今大会でレベルの高い海外選手の安定性、ランディングコントロールの上手さを見ることができて良い勉強になりました。

今後、私も更に上達ができるように努力していきたいと思います。

□平木啓子

私の大スポンサー様であるアビ野々垣会長のお膝元の池田山で開催される日本選手権ということでお声をかけていただき参加を決めました。

自分がしてきた競技とは畑違いですので、どうなることやらでしたが、風が味方してくれる好運に恵まれ女子日本選手権者になることができました。

とても嬉しいです。

このような機会をくださった野々垣会長、大会運営に尽力された池田山の皆さん、練習に協力してくれたスカイ朝霧の皆さん、ありがとうございました！



日本選手権者の二人、和田浩二（左）、平木啓子。

学連 ニュース

10月になりました。大会シーズンも落ち着き、飛び的にはそこまで荒れもせず、気温的にもベストな時期ですね。HGの初飛びにも期待したい時期です。

こんにちは。日本学生フライヤー連盟(JSFF)理事の堀聡史です。今回は、夏休みに開催されたイベント3つの報告を行います。

まず、PGのJSFF公認大会である「尾神岳Paraglider Student Cup」についてです。今年度は8月22日～24日（公式練習日無し）で尾神岳にて開催されました。昨年までこの大会は、NPになってないと山飛びできず、せっかくホームエリアでは初飛びしたのに大会先では講習場に帰ってしまうケースが多く2ndクラスに不人気でした。しかし今年からは条件次第ではフリーフライト可能としていただき、結果として大会参加者の増加に繋がりました。尽力していただいたインストラクターの方々、大会スタッフの方々、本当にありがとうございました。この場を借り

てお礼申し上げます。天候は曇りが多かったものの、Expert 9人、1st 12人、2nd 9人の計30人が選手として参加し、全クラスとも競技が成立しました。

続いて、HGのJSFF公認大会である「nasa STUDENT CUP」についてです。今年度は8月29日～31日（公式練習日28日）で足尾にて開催されました。こちらは残念ながら公式練習日以外すべて悪天候のため全クラス不成立となってしまいました。この大会は毎年天気に悩まされながら1日か2日なんとかできることが多かったのですが、今回は3日すべて雨。こればかりは仕方のないことですが、悔しいですね。それでも、合計30人超が開催地足尾に遊びに来て、エリア間の親睦を深めることのできた大会だったと思います。

そして、JSFF最大のイベントと言っても過言ではない、新入生向け「砂丘合宿」が、9月5日～8日で鳥取砂丘

にて開催されました。例年このイベントも天候に悩まされることが多いのですが、今年度は4日中3日が晴れ、新入生には絶好の合宿になりました。上級生、途中参加などもすべて含めると150人を超える参加人数となりました。この合宿に参加した人たちが今後大会や各種イベントに参加することを期待していきたいです。

もうひとつ、社会人のPGアキュラシー日本選手権に学生枠として1名参加させていただきました。HGは社会人大会への参加は多いのですが、PGは少ないので、このようなお話はありがたい限りです。ですが、今回は学連としても対応が悪い点があったので、改善していきます。

これからもJSFFでは、イベント等を通じて学生フライヤーの定着を目指していきます。今後ともJSFFをよろしくお願いいたします。



尾神岳Paraglider Student Cupには30選手が参加。



好天の砂丘合宿、参加者150人超のイベントになった。

JHFからのお知らせ

■補助動力副読本を頒布しています

「JHFパラグライディング教本副読本[動力付きパラグライダー（補助動力技能証／MPG技能証課程）]」を頒布中。

動力を使用したパラグライディングの練習のポイントと最低限の基礎知識を載せており、パラグライディング教本とともに繰り返し読んで、安全で楽しいフライト活動の助けにさせていただくものです。初心者の方はもちろん、すでに技能証をお持ちの方も、ぜひお読みください。

価格・申込方法：

頒布価格1,000円（送料別）。JHF登録スクールまたはJHF事務局にご注文ください。注文書はJHFウェブサイト「書籍情報」からダウンロードできます。

■PG教本基礎技術DVDを頒布中です

基礎技術DVD「JHFパラグライディング教本基礎技術」、続いて第2弾「テイクオフとランディング」を頒布しています。

「JHFパラグライディング教本基礎技術」には、JHF教本のA・B級からクロスカントリーまで各課程を修了するために求められる基本的なフライト技術について、ベテラン教員による模範演技を収録しています。実際の飛行での操作を、複数の方向から近接撮影したものが2画面で表示され、各操作で

の動きをはっきりと見ることができ、判りやすく表現されています。

第2弾は、フライトの基本中の基本であるテイクオフとランディングを収録しており、フロントライズアップの基本から場周アプローチによるランディングまで、各操作のポイントをつかみやすい内容です。

価格・申込方法：

頒布価格それぞれ1枚1,500円（送料込）で、お申し込み10枚毎に2枚追加してお送りします。入手ご希望の方は、最寄りのスクールでご購入いただくか、JHFウェブサイトにて注文書をダウンロードのうえお手続きください。

■JHF備品を貸し出しています

JHFでは備品の貸し出しをしています。ご希望の方は「JHFウェブサイト」→「JHFのご案内」→「無線機その他備品貸出」より貸出依頼書をダウンロードし、必要事項を記入・入力して、FAXかメールでお申し込みください。

■住所を変更したらお知らせください

住所を変更された方は、お手数ですが、下記項目をメール、FAX、郵便などでJHF事務局にご連絡ください。

フライヤー会員No.／お名前／変更後のご住所／連絡先電話番号／メールアドレス

会費を銀行口座振替・コンビニ送金される場合、銀行等から新住所の連絡はありません。

■JHFウェブサイトのご活用を

JHFレポートは3ヶ月毎の発行なので、新しいニュースをすぐにお届けすることは残念ながらできません。そこで多くの方がJHFウェブサイトをご覧になっていますが、「会員ページのトップ、トピックスしか見ない」という人も少なくないようです。ウェブサイトの隅々まで見ていたら時間がいくらあっても足りませんが、たまにはトピックス以外のページもご覧ください。有用な情報がたくさんあります。

JHFの舵取りを行う理事たちがどのような活動をしているのか知りたい方は「JHFのご案内」の「情報公開について」ページ、理事会議事録をお読みください。何かの申請などをしたい方のための「フライヤーサポートデスク」もあります。ぜひご活用ください。

■お問い合わせはJHF事務局へ

公益社団法人日本ハング・パラグライディング連盟

〒114-0015 東京都北区中里1-1-1-301

TEL.03-5834-2889 FAX.03-5834-2089

E-mail : info@jhf.hangpara.or.jp

http://jhf.hangpara.or.jp/

*このJHFレポートには賛助会員からのお知らせを同封しています。また、神奈川県在住の方には、県連盟からのお知らせも同封しています。

被災地復興 応援プロジェクト 「空はひとつ」

東日本大震災被災地への義援金を引き続き募っています。

◇義援金振込先

三菱東京UFJ銀行（銀行コード0005）

巣鴨支店（店番号770）

口座番号 普通 0017991

口座名義 公益社団法人日本ハング・パラグライディング連盟

上空利用可能デジタル無線機使用のお薦め

平成34年にアナログ式簡易無線機の運用が終了することに備えて、JHFではハンググライダーやパラグライダーのフライト中に使用する無線機として「簡易無線登録局」対応のデジタル無線機の使用を推奨しています。

上空利用5チャンネルを搭載、デジタル方式の音声なので、混信もすくなくクリアで聞き取りやすくなっています。STANDARD製のVX-291SとVXD450SにICOM製IC-DPR30、さらにSTANDARD製VXD1Sが加わりました。

JHF賛助会員（JHFウェブサイト）にバナーを掲載）からも購入するこ

とができます。

なお、JHFではSTANDARD製デジタル無線機を14台保有し、登録会員に貸し出しをしています。ご希望の方は上記の「JHF備品を貸し出しています」に沿ってお申し込みください。

すでにデジタル無線機をお持ちの方は、無線機の登録手続きを済ませ利用料を納めているか、ご確認ください。登録をしないまま無線機を運用すると、不法無線局として処罰の対象になります（1年以下の懲役または100万円以下の罰金）。うっかり忘れていたということのないようお願いいたします。

JHFレポート219号

発行日：2017年（平成29年）10月20日

発行：公益社団法人 日本ハング・パラグライディング連盟（JHF）

編集：JHF事務局

印刷：株式会社サンライズ